

剤である。

## 2) 歯の外傷とその対応について

伊藤 史生・渡辺 陽 (日本歯科大学新潟  
 小林英三郎・佐藤 光 (歯学部口腔外科学  
 又賀 泉 教室第2講座)

今回われわれは、1974年11月から1997年6月までの22年8か月間に経験した歯の外傷に関して1004例中524例637部位を検討したので、歯の外傷とその対応について治療例を含めその概要を報告した。

対象は年齢0歳から79歳で、平均は22.0歳であった。性別では男性348例、女性176例であり、性差は約2:1と男性が多かった。受傷原因として、転倒・転落が262症例で半数を占めた。来院までの期間は、受傷当日に来院している症例が245例であった。損傷の分類では、脱臼181部位、亜脱臼221部位、陥入14部位にあり、処置内容では整復固定227部位、経過観察183部位、抜歯105部位、修復61部位であった。合併損傷では、脱臼歯のみが167例、357例が軟組織、骨折にあった。受傷後約1か月での生着率は、脱臼91.6%、亜脱臼92.8%、陥入81.8%という結果だった。外傷歯の治療において、適切な歯の保存法、専門医による早期処置、合併損傷の有無やその程度が生着率を高める要因と考えられた。

## 3) 右横隔膜損傷による血胸の一例

羽賀 学・金沢 宏 (新潟市民病院心臓  
 中沢 聡・山崎 芳彦 (血管呼吸器外科)

症例は2tトラックに跳ね飛ばされ受傷した53才の男性。他院に搬送され、右血気胸、脳挫傷、外傷性くも膜下出血、肝被膜下出血の診断で胸腔ドレーンを挿入され加療されていた。出血はドレーン挿入時に約500mlの排液、それ以降止まっていたが第4病日にせき込んだのをきっかけに500ml/時の出血が始まりショックとなり当科を紹介された。緊急手術を施行したところ右横隔膜に穿通傷とともに裂傷が認められ、この裂傷からの出血がショックの原因と考えられた。2-0タイクロン糸を用いて損傷部位を修復し手術を終了した。左に比べ少ないとされる右側の横隔膜破裂で受傷後長時間経てからの再出血を来した症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。外傷性血気胸の症例は急性期を過ぎても慎重に経過観察する必要があると示唆された。

## 4) 新潟地域医療情報ネットワークプロジェクト

—地域病院当直情報システムの試み—

羽柴 正夫 (新潟大学  
 医療情報部)  
 吉川 恵次 (新潟大学  
 救急医学部)  
 鈴木 靖 (済生会第二病院  
 内科)  
 市川 高夫 (済生会第二病院  
 麻酔科)  
 広瀬 保夫 (新潟市民病院  
 救命救急センター)

インターネットの医療への応用が期待されているが、アプリケーションが明確でないことなどから、医療機関の接続や医療関係者の利用は、未だ一部にとどまっている。そこで、地域におけるコンピュータネットワークの医療、保健、福祉への適用、病院情報システムなどネットワークの普及、インターネットの利用促進などを計るために、新潟地域医療情報ネットワークプロジェクトを開始した。独自ドメインによるホームページ (<http://www.lamen.or.jp/>) の公開、医療情報の交換を目指したメーリングリスト運用、インターネットの医療機関への導入支援などを行ってきた。今回、救急医療情報システムのプロトタイプとして、ホームページを利用した『地域病院当直情報システムの試み』を行った。IDとパスワードで保護されたページから、各医療機関で当直情報を入力・訂正し、閲覧は、特定のユーザーにのみ可能である。さらに、汎用のネットワークを基盤としているので、地域の住民への情報サービス、既にある全国自治体などの救急医療情報の利用、電子メールなどのインターネットでの資源の活用などが容易である。これらの仕組は、地域救急医療情報システムに、十分応用が可能と考えられた。

## II. シンポジウム

【本県の救急、災害医療対策をめぐる最近の動向】

### 1) 新しい救急医療体制および救急医療情報システムについて

藤田 弘一 (新潟県医業国保課)

本年の3月に新潟県救急医療検討委員会と新潟県災害時医療救護対策協議会から2つの報告書が提出された。いずれも、今後の県の取組みの基本的方向を示すものであり、今後その施策化が課題となる。報告書に基づく救急医療、特に災害時医療救護対策について、今後取り組